

「わたしに従いなさい」。このイエスの声掛けに、徴税人レビは「立ち上がって」（他では「復活」と訳されている言葉）、すなわち命新たにされる喜びを持って従っていきます。当時のユダヤ社会では、徴税人は罪人と見做されていました。ユダヤを支配する敵国ローマへの税金を徴収し、さらには、規定以上のお金を取り立てて私腹を肥やしていたこともあったからです。民族の裏切り者、異教徒達と交わって汚れている者、神の救いから漏れた者、彼らと関わってはならない…それが徴税人に向けられたユダヤ社会の眼差しでした。そんななか、徴税人である自分に声を掛け、一緒に食事の席で交わろうとする人物が目の前に現れた…レビは驚きを隠せなかったでしょう。それを見たファリサイ派の律法学者は尋ねます。「どうして、徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」。イエスは答えました。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

罪人や徴税人との交わりを嫌ったファリサイ派は、自他共に認める律法を守る「正しい人」と見做されていました。しかし、神の前に正しい者などいるのでしょうか。「正しい者はいない。一人もいない」（ローマ3:10）、私達は皆、神が求める愛の道からの外れに生きてしまう罪人であると聖書は捉えています。でも、イエスが罪人を招くために来たというのであれば、招かれているのは罪人である私達一人ひとりであることが分かります。星野富弘さんは、「『あいつは、ああいうやつなんだ』とほんのわずかしから知らないうちに決めつけてしまうことが、なんと多いのだろう。花の色が一日にして変化するのだから、まして心を持っている人を見ると、自分のわずかな秤で決めつけてしまうのなんて、まったく間違っていると思う」と語られます。また、聖公会牧師スポングは、そのようにして自分や他者を偏り見て印を告げたがるのは、全ての人間が抱えている「一種の病である」とさえ表現しました。私達は、そのような病（罪）を抱えていることに気づかぬまま、神の前に平然と生きていることが少なくないのかもしれない。病人に医者が必要であるように、罪人である私達には、罪から脱するために必要なことを諭し、かつ救い上げる方が必要です。

あの人達と同じ食事の席にはつきたくない…しかしきっと、イエスは、その食事の席についているのでしょうか。そして、「わたしが来たのは、罪人を招くためである」と語りつつ、「わたしに従いなさい」と私達を主の交わりのなかに招き続けているに違いありません。

（文責：望月達朗牧師）

